

慶応二年二月二十二日より慶応二年二月廿四日まで

P8310568right

廿二日子 濃陰漸に晴

曉第五時半比、渡船へ乗組船改番船前にて役名姓名口上断り也、第七時半頃阪地（着坂）八軒屋へ着船、上り場向うに仮に小休所設け有し、同所へは不立入直に平鎌、小休所へ到建白の件を打合せ同道登宮、講武所御成にて伊賀守殿、出雲守殿、御登城有し右御兩人へ兩人同口建白す、作の鉦一は宅しらべ、御殿にて宅状（江連賀）へは私状へ、す）
楽へ

渡し明日着御届御用状差立へさし込積り、御目付に旅宿割り掛有し、右掛にて旅宿等
手数有し江戸堀四丁目会所を旅宿とす、諸事引受代上八百文下七百文也

着阪の賀（土分五十疋、押五百文、中間老朱）一同遣す、作の鉦一金一同道、着賀旁御用箱受取に
来る

廿三日丑 晴午下より陰

P8310568left

出 殿、河内守殿、伯耆守殿へ昨同様平鎌と共に建白す、明日午下召出有し旨

伊賀守殿被仰聞く、府中宿にて加藤隠州より被頼候乗、山次郎へ届もの老書、為持遣す、

山鹿、尋問面晤す、間宮より割煮老折、旅中尺として贈り来る、洋製革小懷物を酬う、登
作

本日帰省し親共より霜金糖一折贈り越す、長坂半より醇酒一壇贈り来る、銀織、煙草入
筒一（個）を酬う、旅亭より昨夕着賀として粗にながらも酒肴の設あり、本夕は一壇酒を出せり
廿四日寅 雨意

出 殿、御軍艦局を日々仮詰所に仮受、一同世話相成に付昨来の割煮品へ茶半斤
を添へ持出す、平鎌共々 召出有し今般続々の条件曲さに言上す難有

上意を奉戴、出雲守殿より洋品の内に可成品有し候はば差出様、御内意有し

印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。